

○超高齢社会における部分欠損補綴治療の役割と重要性

—部分床義歯(審美と機能)、インプラント補綴(固定性、可撤性)、歯周補綴の長期経過症例(10~37年)からの検討—

「講演内容要旨」

我が国の平均寿命と超高齢社会を考えると部分欠損患者の増加が予想され、部分床義歯の役割は極めて重要になります。部分床義歯を装着することにより下顎位の長期保全を図り、顎口腔系全体の調和を保つことは、総義歯年齢の遅延や難症例化の防止を図ると共に患者の健康寿命の延伸とQOLの向上に不可欠であります。

しかし、義歯の装着が長期に及ぶと様々な問題点が生じてくることもあり、長期維持を図るには総合的な診査、診断能力、治療技術および永続的メンテナンスが必要になります。したがって、より良好な予後を得るためには義歯装着後の経過観察を行い、その結果を十分に検討し、後の治療方針にフィードバックしていく必要があります。

また、近年、部分床義歯のメタルクラスプに対する審美性や可撤性ではなく固定性装置が良いなど患者のニーズも多様化し、さらにインプラントの普及に伴い欠損補綴の処置方針も変遷してきている。演者も1987年頃からインプラント補綴を開始し、固定性だけでなくインプラントオーバーデンチャーや遊離端欠損後方の支持としてインプラントを支台とした義歯の設計も行い、費用対治療効果を考慮し、義歯10年、インプラント20年を目標としてきました。その結果、義歯に関してはある程度の目標が達成されてきているが、インプラント適応患者は高齢化してきており、エイジングによる身体的および口腔内環境の変化や経済的な面などから対応に苦慮することも少なくありません。

本大学病院には他医院での失敗例やトラブルなどで来院するいわゆるインプラント難民と言われる患者が多数来院しており、それらを散見するにつけインプラント補綴を始める前には、従来からの部分床義歯・総義歯補綴の修得が第一義ではないのかと感じられます。

そこで今回、このような状況の中で我々は如何に患者の要求に対応していけば良いのか、長期維持はどこまで可能なのか、限界をどこに置くのか、エイジングにどう対応していくのかを長期経過症例から皆さまと共に検討したいと思っております。

トピックスとしてメタルクラスプの審美不良の対応策として、演者が長年臨床応用してきたDr. ダリル・ビーチ考案のビーチアタッチメントと本講座で約8年間、基礎的・臨床的検討を行い患者満足度の高い良好な結果が得られているアセタールレジンクラスプ(ホワイトクラスプ)の製作法と臨床応用についても時間の許す限りお話したいと思います。